

共同研究の経緯

民具の名称に関する基礎的研究

——民具資料の文化資源化——

研究代表者 神野 善治

はじめに

今から5年前のことである。神奈川大学の日本常民文化研究所を拠点に、『国際常民文化研究機構』を設立する構想があるので、そこで「民具の標準名」について考えるプロジェクトを立ち上げて、そのまとめ役をしてもらえないかというオファーを、佐野賢治さん（当時の日本常民文化研究所長）からいただいた。その話を聞いて、すぐに思い浮かんだのが「日本常民文化研究所」がまだ財団法人だった最後の時期に、同研究所を事実上、ほとんど一人で切りもりされていた河岡武春先生のことだった。東京三田のマンションの一室にあった研究所で開催されていた民具研究会の折や麻布十番の喫茶店などで、河岡先生の口から「民具の標準名」の必要性が熱く説かれたことを思い出した。その思いを受けて、このテーマを、学芸員仲間の研究会でとりあげて、畠山豊さん、小川直之さん、鈴木通大さんなど南関東で活躍していた学芸員仲間とともに『広辞苑』から語彙を抽出する作業などを試みたこともあった。日ごろの業務の片手間にできることではないことを悟って、中断したことを思い出す。また、伊豆の狩野川水系で用いられていた「カニモジリ」に私が関心を持ち、その調査を展開して、当時勤務していた沼津市の歴史民俗資料館でこの漁具を中心に「^{うけ}筥」をテーマにした特別展を企画したときには、河岡先生からは渋沢敬三がかつてのアチックミュージアムで「筥」の研究を推進したときの「筥調査カード」を提供してくださり、戦争で暗礁に乗り上げていた「筥」の方言資料の再検討を託されたことがあった。その作業を通して民具とその呼称の問題のいくらかに触れることができ、個人的な課題ともなった。この「筥」の例で顕著のように、民具のモノとしてのあり方の多様さの上に、実に多様な方言名が重なっている状況をどのようにたどれば、比較検討の道筋がたどれるかが、いくらか見えてきたように思ったものである。そこで、今回のプロジェクトでは、「民具の標準名」そのものが、果たして設定しうるものなのか、そこにどんな問題が含まれているか、基本的なところから考え直すチャンスにしたいと考えて、あえて「民具名の基礎的研究」を志すプロジェクトとさせていただいた。研究機構の他の班は、現地調査を主としてチーム編成をしているが、この班はすでに各地で民具のコレクションにかかわり、博物館等で活躍してきたメンバーに参加を求め、事務局には作業チームを作って、文献やコレクション目録からデータの抽出と整理を長期的に行うことで、かつて学芸員仲間では実現不可能だった基礎的作業を通して、課題を明らかにすることを計画したのである。以下にその経緯をおおまかに紹介しておく。

1. 事前作業としての「民具の標準名」の再検討

まず、プロジェクトを開始する前段階として、方向性を見定めるために、そもそも「民具の標準名」がなぜ求められ、民具の研究とどう関わるか。このことを基本的に考えるための作業を開始した。具体的には、民具とその名称について考えるための、関連文献を探索すること。また、民具名を考えるための検討資料として、取り組むべき実物資料の対象を見定めることである。そのために、次稿に示すように、言語学における「モノと名前」の捉え方に学ぶことと、方言研究の成果を辞典類から抽出することで、民具名の研究にいかに関与するかという課題に取り組んだ。また、具体的なモノのデータとしては、既存の民具コレクションのうち、山村の生活の民具を総合的にカバーしている福島県奥会津地方の只見町のコレクションを最初の検討対象とすることを決め、その現状を確認し、そのコレクションに直接関与した研究者とともに、民具名の捉え方を具体的に検証する作業を開始した。その中で、長年博物館の資料データベース構築に関わってこられた八重樫純樹さんから、民具のコレクションと民具名のあり方にかかわるデータベース構築の課題について事前のレクチャーを重ねていただいた。

2. 方言辞典からの民具名抽出

1) 『全国方言辞典』

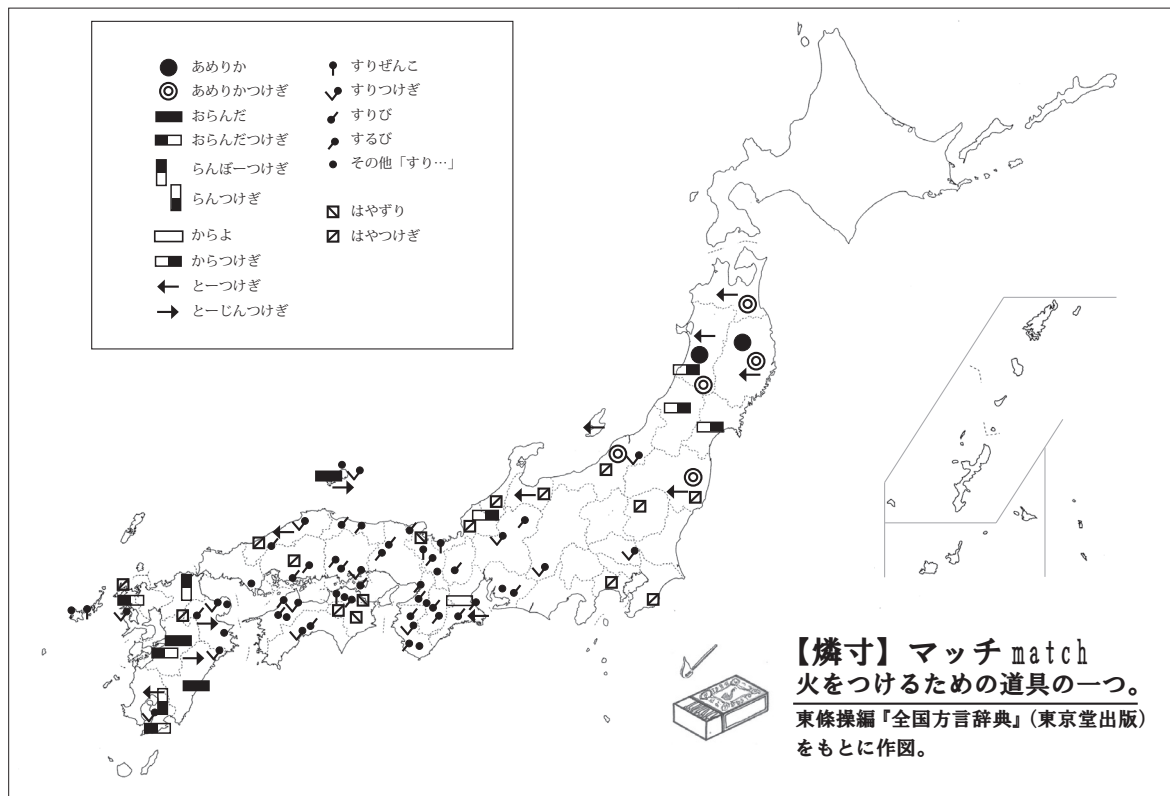
一方、民具名の比較検討を行う上で、「方言名」について、すでに収集されている方言集の類から事例を集めることを検討してみた。試みに東京堂出版『全国方言辞典』（東條操編）から民具名と考えられる項目を抽出する作業を行ってみた（図2参照）。かなり手間暇のかかる作業をスタッフがこなしてくれて、その結果を表計算ソフトに入力することで、種別や名称を検索することが可能になった。ただ、元データは、様々な出典から抽出されたものであり、実態をどのように反映しているか検証することが難しい。その限界を承知した上でも今後の民具名の探索の手がかりにはなるのではないかと考えた。

方言の記事には、いくつも興味深いモノの方言が登場したが、その中で、面白い事例に出合ったのでひとつだけとりあげておこう。

それは「マッチ（燐寸）」の方言についてのデータである。おそらく今ではマッチを使ったことのない子供たちがいる時代になったと思われる。キャンプなどで、マッチ1本の火だけで、薪を燃やしつける技を持っていると、今では称賛されるほどになっている。今までに「マッチ」が「民具」の範疇で話題にされたこともないかもしれないが、発火具として生活の中で重要な役目を果たしてきたことは確かだ。19世紀半ばにヨーロッパで発明され、明治時代には日本にもたらされて、日常生活に取り込まれていったために、「マッチ」の語は、全国に共通語化して方言などがあるとは思わなかった。それが、意外にも統一的に普及した言葉ではなかったことが、多様な方言名の存在からわかってきた。

「燐寸」以前に存在していた「付け木」の呼称が新しいモノの名に反映していた。「付け木」は、火打ち石（燧石）などで火花を散らし、ほくち（火口）と呼ばれる綿状の消炭に落として得られた火種を炎に燃え立たせるために必要なものだった。この「ほくち」と「付け木」がないと火種から炎を起こすことは困難だが、この2つが用意できても、点火するまでには、ちょっとしたコツが必

図1 燐寸（マッチ）の方言の図



要だった。それが燐寸の出現で非常に簡単に炎を起こすことが可能になったのだ。点火技術の革命的な発明だったといえる。軸先に着けた薬頭を箱の側面に塗り付けた特定の素材に擦り付けると、容易に発火して炎が立ちあがる。それで「擦り火」「擦り出し」「擦り」などと呼び、従来の「つけぎ」の語の変化形として「擦りつけぎ」「早つけぎ」などの名が生まれている。面白いのは、おそらく伝来元だと思われた「アメリカ」や「オランダ」の国名あるいは中国か外国の意味で用いられる「から」の名をつけた呼称が残っていたことだ。「亜米利加つけぎ」「阿蘭陀つけぎ」「蘭方つけぎ」「蘭つけぎ」など。「からよ」「から付け木」という呼称は「唐つけぎ」「唐人つけぎ」と同じ発想の命名だろう。これらの方言の分布状況は、全体の事例数が少ないので必ずしも実態を反映しているかどうかかわからないが、地図上に載せると、いくらか分布傾向があったことが予想され、東北の4県と新潟県に「アメリカ」と九州に「オランダ」の名が見られるのが興味深い。いずれにしても、方言の広がりの中に、この品物が普及していった歴史の一端が垣間見られることに注目しておきたい。同じようなことが、さまざまな民具の場合にも見られないだろうか。

2) 「習俗語彙集」からの抽出作業

また、柳田國男が編纂した『分類習俗語彙』の語彙集が刊行されていて、分野ごとの習俗の方言を「習俗語彙」として集成しているが、これらの膨大な語彙の中から「民具名」を引き出す作業もチームの若手メンバーが実現してくれた。対象としたのは次の13の語彙集である。

【分類祭祀習俗語彙】 図書刊行会 1963 年

【分類食物習俗語彙】 角川書店 1974 年

【分類農村語彙】 上・下 図書刊行会 1975 年

【分類山村語彙】 図書刊行会 1975 年
【分類漁村語彙】 図書刊行会 1975 年
【服装習俗語彙】 図書刊行会 1975 年
【産育習俗語彙】 図書刊行会 1975 年
【婚姻習俗語彙】 民間伝承の会 1975 年
【葬送習俗語彙】 図書刊行会 1975 年
【歳時習俗語彙】 図書刊行会 1975 年
【禁忌習俗語彙】 図書刊行会 1975 年
【居住習俗語彙】 図書刊行会 1984 年
【分類児童語辞典】 図書刊行会 1987 年

その結果、約 600 種類、合計 4,000 件余の事例を引き出すことができた。この作業では、語彙の解説文を読み込んで、共通する民具がまとまるようにキーワードを加える作業を試みてもらった。ただ、個別の名称についての出典は明らかなものが多く、写真や絵図などの情報も添付されていないので、形態情報を読み取ることができない。そのような限界があることは承知の上で、コンピュータ上の文字データとして一覧表を作成したものであるが、この表からも、分野や種類別、方言の呼称などから検索して、様々な項目をグループとして取り出すことができるので、今後の民具名の検討作業に何らかのヒントが得られる可能性がある。

たとえば、試みに「嬰兒籠」として抽出した語彙は、産育習俗語彙で 22 例、分類食物習俗語彙から 1 例の合計 23 例が拾えている。宮城県仙台地方では「いちご、藁で平筒形に作ったもので、この中に小児を入れ、梁から綱を下げてつるしておく。大小いろいろに作って冬期に飯の保温用にも使用する。これをイヅミと呼んでいる範囲は最も広い。飯詰の意。」とある。

また「臼」は、分類食物習俗語彙から 24 例、分類農村語彙（下）から 2 例の抽出。方言名だけ並べると「いざりうす・いじやうす・おとこうす・おなごうす・かちうす・かぶうす・からうす・きずるす・こしきりうす・こっこべつきうす・たてうす・つきうす・てうす・どうぎりうす・どずるす・なでうす・なぜうす・ねばりうす・みぐす・やりきうす」が各地から収集されている。臼のいろいろなバリエーションがそのまま混在していると思われる。

また「釜」は、分類漁村語彙から 34 例拾われているという具合である。

3) 『日本言語地図』と『日本の方言地図』

方言研究の成果を活用するという点では国立国語研究所の『日本言語地図』の検討が重要だ。その中に民具に相当するものは少ないが、名詞ばかりでなく、他の品詞も含めて、方言の地理的分布から読み取れることの可能性が豊富に示されていることが重要である。そのうち主要な成果が、『日本の方言地図』（中公新書）に抽出されている。

4) 『現代日本語方言大辞典』の読み込み

その後『現代日本語方言大辞典』（明治書院、1989 年刊）の存在を知って、その中から民具に相当すると思われるモノを抽出し、これまでの方言研究の成果から学ぶことも試みた。この辞典も、あくまで方言研究という立場からの調査成果をまとめたものだが、民具名の方言を考える上でも、基本資料として避けて通れないものだと思われた。その内容については稿を改めて紹介する。

3. 地方の民俗誌からの抽出作業

日本全国の地方公共団体によって、それぞれ出版されている地方史・民俗誌の中に民具について基礎資料が蓄積されているに違いない。これらを活用することはできないか。まず「県史」から手始めに、岩手県と宮崎県の「民俗編」から民具名がどの程度抽出できるか作業を試みた。

比較資料として有効なものが含まれている一方で、県全体をカバーするという性格から個別データは精粗の差が著しい。これを47都道府県で作業ができて、比較のために有効な基礎資料となるかどうかと疑われたため、この作業は中止することにした。では市町村や集落レベルの民俗誌の類に、民具の情報について充実したものがあるかどうかを探してみると、これにはめばしいものが散見される。単独で膨大なコレクションを丁寧に紹介しているものもある。それらを全国から収集でき、データベース化できないか。それぞれの所有権者の了解やリストの著作権など困難な問題もあるだろうが、今回のプロジェクトの範囲でできることがないだろうか考えた。そして、結果的には以下に示すように、実物資料が収積されたコレクションを基礎資料にして検討をしていく方法に転換することにしたのである。

図2 方言集・民俗誌から抽出した民具名方言表（一部）

データベースについて

大項目	道具名	名称	派生語	意味	地方	備考	出典
船	船材	あいども		①漁船の櫓の石端部。	上総		全国方言辞典(東京堂出版)
船	櫓	あいり			三重県北牟婁郡。		全国方言辞典(東京堂出版)
運搬具	轆	あうだ			新島石垣島。		全国方言辞典(東京堂出版)
住	団扇	あうち			①島根県鹿足郡。		全国方言辞典(東京堂出版)
農具	唐箕	あうち		②唐箕	②愛知県栗原郡。		全国方言辞典(東京堂出版)
農具	櫓	あお	おー	蜀ののぎを打落したり大豆や胡麻などのさやを打って実を出したりする時に用いる大木櫓。	岩手・宮城・伊豆		全国方言辞典(東京堂出版)
紡織	木綿	あおじ		紺木綿。	滋賀県蒲生郡。		全国方言辞典(東京堂出版)
住	団扇	あおち	あおつ	①団扇。うちわ。	岐阜・奈良・島根		全国方言辞典(東京堂出版)
遊戯・競技	凧	あかえい		(赤鯉の意)方形の一面に尾をつけた凧。	鳥取		方言辞典(東京堂出版)
住	薪	あかし		③細い薪	北陸・中部・近畿・香枝		方言辞典(東京堂出版)
住	蛸燭	あかし		①ろうそく	仙台		方言辞典(東京堂出版)
漁業	もどり	あぎ	あげ	③釣針のもどり。	岩手県気仙郡		方言辞典(東京堂出版)
漁業	釜	あぎ	あげ	⑤釜の中に逆に組んで魚の逃げないようにした釜	栃木県安蘇郡野上		方言辞典(東京堂出版)

その方言の意味。辞書の解説文をそのまま入力。同音異義語があったものは①、②…と番号をつけている。

現在の都道府県名を記載

派生した語(訛も含める)

その方言が使われている場所。県名、地域名、島名、郡名があるものもあれば旧国名も含まれている。出典(物類称呼)などの記載があるものもある。

4. 民具コレクションからの民具名一覧作成

プロジェクトの具体的な活動としては、すぐれた民具コレクションをベースに、実態に即した「民具名」の比較資料を積み上げることをめざすこととした。

全国的に詳細な調査を展開することは、今回のプロジェクトではとても不可能だが、確実な資料

を積み上げて行く方法がありうるのではないか。それは、民具の個別の基礎データが充実している民具コレクションを、基礎的な検討資料として設定し、そこからスタートする方法である。特に国の重要有形民俗文化財の指定を受けている民具コレクションには、基本的な資料目録と資料カードや実測図が整っているものが多い。これらから基本的な民具についての情報を抽出することで、別の充実したコレクションのデータと比較できるように重ねて行く作業ができないか。幸い、今回のプロジェクト・メンバーには、充実した民具コレクションを構築した博物館の学芸員経験者や行政関係者が含まれている。メンバーが力を発揮できる方法で、作業を進めて行ける方法を検討した。

1) 奥会津只見町の山村生産用具

そこで、最初に基本データづくりの対象として選ばせていただいたのが、福島県奥会津地方の只見町で収集され、重要有形民俗文化財に指定されている「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」2,333点である。すでにすぐれたデータの蓄積ができており、かつそのデータが神奈川大学日本常民文化研究所の協力でデータベースとして公開されている。このデータから、民具名のあり方を考えるための民具名の一覧表づくりを、プロジェクトチームとして改めて行うとともに、研究スタッフが現地に赴いて、実物資料にふれながら、個別資料の名称のあり方について検討を開始した。このコレクションの収集に関与した只見町の新国勇さんと、コレクション収集の監修者である佐々木長生さんが、中心的にこの作業にあたることとなった。

2) 越後奥三面の狩猟用具・羽村市郷土博物館の旧下田家の生活用具

只見の民具コレクションを出発点に、各地のコレクションへ展開していくことを計画し、まず同じ山村の暮らしを支えた民具のコレクションである国指定重要有形民俗文化財の越後奥三面の狩猟用具と、関東地方の農村生活の用具をまとめた羽村市郷土博物館に保存されている国指定重要有形民俗文化財「羽村の民家（旧下田家）」の生活用具についても民具名のリスト化を行った。この2件は比較的小規模のコレクションであるので、民具名一覧をつくる手がかりとしてプロジェクト・チームが目録からの抽出作業をさせていただいた。それぞれの所蔵者である村上市及び羽村市からは画像情報の使用許可をいただくこともできた。

3) 岐阜県徳山村の山村生産用具

中部地方で山村の民具の充実したコレクションとして知られる徳山の山村生産用具のコレクションについて、収集の中心的な役割を果たされた脇田雅彦氏と節子夫人の協力を得て、このコレクションの民具名の一覧表作成を行った。これまでの会津只見、奥三面の資料に加えて、山村の生産と生活に関わるデータが整理され、蓄積されていった。このコレクションについても、プロジェクトメンバーが現地を訪ね、収蔵庫と基本台帳の閲覧も許されて、山村の民具のあり方をこれまでの地域との比較を含めて検討することが実現した。脇田氏は、その民具名一覧表の整備に大いに力を注いでくださった。残念ながらプロジェクト完了前に急逝されたが、その成果を残していただくことができたものである。

4) 沼津内浦・静浦の漁撈用具

同じく中部地方静岡県伊豆西海岸の漁村で、かつて渋沢敬三が中心となって、漁民の古文書資料を発掘し史料集を刊行したのと同じ地域で、マグロ建切網などに関連する漁撈用具、水産加工用具などの充実した民具の収集が実現して、「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」が、国の重

要有形民俗文化財に指定された。このコレクションについて漁具名の一覧表を作成することを行い、また沼津市歴史民俗資料館における衣食住関連の収集資料の閲覧を行った。メンバーも現地を訪ねて、実物と漁場の環境にふれることで、漁撈用具の名称について考察を進めることができた。この調査では、沼津市歴史民俗資料館の全面的な協力をいただき、同館の佐藤裕子（旧姓米山）さんらがその作業を担った。

5) 滋賀県立琵琶湖博物館の民具コレクション

同館が所蔵している民具コレクションについて、収蔵庫資料と、館独自のファイルシステムをプロジェクトメンバーが閲覧を許されて、担当者の用田政晴さんと辻川智代さんから民具名の扱いについて報告を受けた。また、その資料をベースに滋賀県における民具名の一覧作成の協力を得ることとなり、同館のご理解を得て辻川さんにはプロジェクトのメンバーに加わっていただいた。

6) 広島県福山市の「日本はきもの博物館」のコレクション

同館のコレクションにも国の重要有形民俗文化財に指定されているものが含まれている。この博物館で長く学芸員を務められた市田京子さんに協力を求めて、「はきもの」についての分類方法と名称のあり方について、研究会でレクチャーをいただくことができた。

7) 鹿児島島の民具と県立歴史資料センター黎明館のコレクション

プロジェクトチームの川野和昭さんを中心に、黎明館の収蔵資料を中心に、鹿児島島の民具名のリスト化を推進し、メンバーと項目ごとの検討作業を行った。この博物館の膨大なコレクションについても、同館のご了解をいただき、画像情報の利用を許された。

8) 沖縄の民具と県立博物館等のコレクション

プロジェクトチームの上江洲均さんを中心に、県立博物館や久米島博物館に収集されている民具などを検討材料に、沖縄（琉球列島）の民具名のリスト化を推進して、メンバーと項目ごとの検討作業を行った。

以上、各コレクション、博物館資料からの検討結果である民具の地域呼称一覧は、報告書の第2編で紹介する予定である。

5. 地域的に特色のある民具と民具名のリスト化

国指定のコレクションあるいは博物館資料として収集整理されている民具から、民具名の一覧を作成するという作業とともに、全国的な視野で比較するための手がかりとして、個別データにそれぞれ「共通名」のタグをつける作業を行った。その作業のなかで、難しさが判明したのは、地域的に特色のある民具の場合である。この地域にしか無いかもしれないという個性的な民具は、共通名を付けるというよりも、この地方の方言名で表明するのが最も特色が出ることもある。その例として話題になったのが「クモッケツ」というモノ。実態は衣料でもあり運搬具でもあるという布製品で、ゼンマイ採りに着る防寒着を兼ねた袖無しの作業着だ。作業着だと言えれば簡単だが、独特の機能が隠れている。採集したゼンマイをその中に収納できるのだ。裾についた紐を腰に巻いてから、これを着用して採集したゼンマイを脇からその中に入れると、尻の側に溜まる。だんだん量が増えてくると、まるで作業する人の尻が膨れたようになるので、それを「蜘蛛の尻」にたとえてそ

の呼称があるという。そういうゆかしい仕事着が他所にもあるかもしれないが、ひとつの項目として表明するとしたら、その個性的な機能を示す呼称を採用したいということになる。いくつか上位の概念の「作業着」としたら、この個性は表からは埋没してしまうだろう。地域の民具一覧においては「作業着」か「運搬具」の下位概念として、一項目設けて「くもつけつ：ぜんまい採取用の作業着。袖なしで、裾を腰に縛る紐付。」とでも説明した項目を設けておけばよいだろうか。類例が、別の地方にひとつでも確認できた段階で適切な共通名を掲げて全国一覧に登場させるのがいいだろう。たとえば「担ぎ又」という運搬具の場合は、四国や紀州の山間部にいくつかの例が確認されている珍しい民具だが、中国大陸からも発見されていることを勘案すると日本での事例は少ないが今後も類例が出てくる可能性があり、並べておくことが有力だろう。奥会津に見られるコウガイと呼ばれる穂摘具のように、必ずしも全国的には複数の事例が民具の実物資料として稀れでも、考古資料や文献上に相当する類例が見えるものなどがあれば、ぜひ一覧に載せて置くとよい。そういう提案をこの一覧が受け入れられるような仕掛けにできるといい。

一覧に載せる項目の選定方法については農耕用具等を担当した河野通明さんが解説の中でその方向性を示しているのを参考にさせていただきたい。しかし、プロジェクト全体で検討を加えるべき段階で、数か月にわたりプロジェクトの活動を中断せざるを得ない事情が生じた。プロジェクトの復帰後、ただちにまとめの段階に入らざるを得なかったため、それぞれの担当の判断で表明せざるを得なかった。地域呼称（方言名）のデータの検討結果は、次年度に報告することとなったので、さらなる検討を加えていきたいと考えている。

6. 統合的な民具名一覧表作成をめざす

以上の成果、とくに地域で収集されている民具コレクションのデータを集積していくことで、まとめることができた「民具名一覧」が、このプロジェクトの中心的な成果物である。全国版と地域版とは、それぞれ両極からの視点でまとめたことになる。全国版は、分野別に分類的に民具名を並べたリストになっている。項目名が「共通名」に相当するもので、本書では、比較資料として項目を表明することと、その定義を試みた。その際に別に記したように、その項目としての「典型を示す」ようにところがけた。また、民具の用途による分類順には並べているが、いわゆる分類を目的にした表ではないので、上位の概念とその中に含まれる種類（つまり下位の概念）も同じ欄に並列していることには注意していただきたい。

研究班は、東京近辺に在住のメンバーが頻繁に会合を開いて、全国版の民具一覧表の作成に取り組み、地方在住のメンバーは、それぞれの地域の民具名の一覧表の作成に専念して、研究会で検討するというように、作業を分担した。来年度の報告書で、「地域呼称一覧」を提示するとともに、全国版の民具名一覧と合体させることで地域のデータ間の比較ができる一覧が表明できることをめざしている。

共同研究者・研究協力者一覧

共同研究職分	氏 名	所属機関	専 門	所属期間
2. 民具資料の文化資源化				
2-1 民具の名称に関する基礎的研究				
代表者	神野 善治	武蔵野美術大学	民俗学・博物館学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
副代表者	佐野 賢治	神奈川大学	民俗学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	上江洲 均		民俗学、民具学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	川野 和昭	南方民俗文化研究所	日本民俗学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	河野 通明	神奈川大学	民具からの歴史学・ 四季耕作図史	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	高 光 敏	国立木浦大 schools	民具学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	後 藤 晃	神奈川大学	農業経済学、イラン・ トルコ経済史	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	佐々木長生	福島県立博物館	民俗学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	真島 俊一	TEM 研究所	生活学・民具学・ 建築学・道具学	2009. 8. 4 ~ 2013. 5. 25
共同研究者	八重樫純樹		応用情報学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
国内研究協力者	石野 律子	武蔵野美術大学	民具学・道具学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
国内研究協力者	新国 勇		植物生態学、鳥類学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
国内研究協力者	市田 京子	日本はきもの博物館	はきもの研究	2010. 6. 20 ~ 2011. 3. 31
国内研究協力者	高橋 典子	川崎市市民ミュージアム	日本民俗学	2010. 6. 20 ~ 2014. 3. 31
国内研究協力者	佐藤 裕子	元沼津市歴史民俗資料館	民具学	2011. 4. 23 ~ 2013. 5. 25
国外研究協力者	金 宗 奎	韓国国立民俗博物館	建築学	2011. 4. 23 ~ 2014. 3. 31

共同研究職分	氏 名	所属機関	専 門	所属期間
国内研究協力者	辻川 智代	滋賀県立琵琶湖博物館	民俗学	2012. 6. 22 ~ 2014. 3. 31

共同研究職分	氏 名
執筆協力者	脇田 雅彦
執筆協力者	脇田 節子
執筆協力者	関 悦 子

共同研究職分	氏 名	年月日
業務協力者	因 琢 哉	2011. 1. 21 ~ 2011. 3. 31
業務協力者	神野 知恵	2011. 9. 12 ~ 2011. 10. 31
業務協力者	斎藤 玲児	2013. 5. 1 ~ 2014. 3. 31
業務協力者	長井 亜弓	2010. 1. 12 ~ 2014. 3. 31
業務協力者	馬渡 なほ	2009. 10. 1 ~ 2013. 3. 31
業務協力者	三村 宜敬	2009. 10. 1 ~ 2011. 3. 31

※所属機関は 2013 年 4 月 1 日時点